

『作文指導論』

『作文指導論』は、野地潤家先生の前著『作文教育の探究』（昭和47年7月20日、文化評論出版）に続く書である。「作文教育の歴史研究・比較研究・原理方法の研究に二〇年ちかく携わって」（本文一べ）来られた先生が、次々と、新たな研究課題にとりくまされていく。先生は、書き続け、書き深めるご実践の中から、作文学習・指導の基本、原理・方法を明らかにされ、さらに残っている課題を鋭く指摘して、今後の研究・実践のありようを展望し示唆して下さっている。

本書は、五章から成り、ご論考二四編（昭和33年10月から昭和48年4月までに執筆・発表されたもの）が収録されている。また本書は、『国語教育原論』（昭和48年2月10日、共文社）に始まった、野地先生の国語教育研究叢書全六巻を完結させる巻でもある。

本書の内容は、次のように構成されている。

I 作文指導の原理と方法

- 一 言語表現における思考と創造の関連  
— 芥川龍之介の震災に関する文章群を中心に—

二 『子ども』における『表現』の探究

- 低学年の表現像の探究  
— 一冊の綴り方文集から—

四 中学年の表現像の探究

- 芦田忠之助氏のばあい—  
— 高学年の表現像の探究  
— 蒲池美鶴ちゃんのばあい—

五 高学年の表現像の探究

六 これからの作文指導  
七 二年生の作文指導

- 一三つのかなめ・五つのポイント—  
— 書くことのきびしさとたのしさ  
— 八 読書指導における「書くこと」

II 作文指導の基本問題

- 一〇 学校社会における記録活動の組織化  
一一 文集の意義と価値  
一二 文集による作文教育  
— 一つの学習史—

III 文集の個性と価値

- 一三 文集の個性と価値  
一四 文集の生命と価値  
一五 文集のほんとうの価値  
一六 わたくしの見た実践  
— 広島市八木小学校—

IV 作文指導の歩み

- 一七 文集勉強のすすめ  
一八 大正初期の作文教育論  
— 垣内松三氏のばあい—

V 昭和前期の作文教育

- 一九 佐々政一の作文教育  
二〇 中国の作文教育  
二一 中国の作文教育  
— 日中比較国語教育研究—

VI 中国の作文教育

- 二二 中国の作文教育  
— 「文章作法」を中心に—  
二三 中国の作文教育  
— 「作文指導」を中心に—

「まえがき」の中で、野地先生は、第1章

の一と八は「共に新しいとらえかたを目ざしたもので、そこでの自己発見を今後もだいたいにしていきたいと念じている」と述べられ、八については、「昭和四二年（一九六七）深秋、母をなくした直後の悲しみの中で書きしるした文章で、忘れがたいものがあふれてくる」と添えられている。母をなくした悲しみは深く、癒されることはない。その悲しみに溺れることなく、張りつめた心で、研究課題にまっすぐに向かい、ルナルが、うまい、美しい、正確な一句を求め、簡潔で味わい深い表現を生み出す様を見すえていられた。「書き深め、書くことを的確にしていくなには、ただ書くだけでなく、書くことの省察を怠らぬこと」（七九べ）その結果、先生の文章とルナルのことばとが一体となり響きあって、先生の自在な筆運びがきわだつていた。「書くことのきびしさと楽しさ」をまざまざと感じさせられる文章である。

先生は、作文教育の究極の目標を「みずからをいきいきと精確に表現しうる主体（個性）の育成」（六八・六九べ）に置かれ、その表現主体が「創造への種子の受胎を、どのように具象化し、形象化するのか。その努力と苦勞こそ、表現活動のすべてであろう」（二二べ）と断定されている。「相手をおたたく受けとめ励まし、自己にやめぬくように」との精神がこの書でも貫かれていた。

(A5判・二三八ページ・二二〇〇円  
昭和50年5月1日、共文社刊)  
(木下紀美子)